

神崎郡書写教育研究会

田原小学校 研究授業

講師 小竹光夫先生

1996.6.24(月)

小竹先生のセリカでドライブだ～！！初めて乗せていただきました。いつも噂にはお聞きしている「空飛ぶ車」でしたが、しっかり実感として納得しました。梅雨真っ盛りで、朝から雨が降ったりやんだりの嫌な天気だったのですが、空飛ぶ車はそんなことにめげることもなく、目指す小学校までぶっとんでいったのですから。

まず、事前にいただいていた指導案の授業を観察させていただき、その後小竹先生による授業の感想を含んだ講演を拝聴しました。私自身も卒論のテーマに合う授業だということで、指導案を読ませていただき、授業観察の視点のある程度定めていったつもりだったのですが、先生の視点の広さと深さには、とてもとても足元の影にも及びませんでした。当たり前ですね。

学校における書写教育のことを中心に、いつもながら多岐にわたった魅力たっぷりの講演でした。以下、その記録です。先生の醸し出される雰囲気までは、とても再現することはできないでしょうが…。



おもしろい授業であった。特に今日は、自己主張しつつも盛り上げてくれる子どもがいた。また、基本的なことは押さえられているが、押さえるために網羅的にいろいろなことをカバーしなければならないので、準備などが大変になってくる。

ただ、今日の授業で教師の態度として、子どもに「先生ずるい」と言われるかもしれないことがあった。全部カードを用意していて一度も板書しなかったこと、ビデオを見せただけで実際に筆を持って書いてみせなかったことである。もちろん、総てのことを一時間におさめるためには、こういった（カードやビデオなど）箱状のものをつなぐことになるのは仕方ないだろう。教師の側には素晴らしい充実感があるが、子どもにしてみれば少し物足りないのではないだろうか。「先生自身の生の字を見せてほしい」という欲求が残るだろう。

また、さまざまな補助教材については、点画ピースのような「固定化した線」とビデオのような「動く線」を結び付けた学習を考えたい。例えば、点画ピースの上を筆でなぞって見せてやることはできないか。墨をつけて書くと下手なのがバレるというなら、

水書きでも筆使いを直接見せてやることはできないだろうか。目標（そのとき書く文字）に到達するために、どのような道筋を辿ればよいかを考えるのが教育方法論である。さまざまな筋道を精選していくのが教材研究であるといえるが、その中で子どもに不安感や不信感を抱かせるのは、教師に実技力が伴わないことであろう。この実技力に対する不安をカバーするのが、補助教材であり、それらを相互に関連付けた学習である。点画ピースで輪郭が消えないようにしておき、上から水筆でなぞって実際の筆使いを見せてやるということは、実技力がなくても可能なはずである。「目習い」・「頭習い」・「手習い」のどの活動も、取り入れていく配慮が必要となろう。

今日の授業では、手本となる「家」を学習する理由を考えている姿勢が見られたのでよかった。学習要素といわれることが多いが、なぜその語句がそこに存在するのかを考えることが授業を支え、「何を教えるのか」を明確にすることにつながるのである。

ただ、今日は研究授業ということもあってか、「パターン」としてできすぎているという感があった。ある程度の「パターン」は必要であり、それがわかっていればどこで範書を見せ、どこに力点を置き、どこで力を抜くかということも考えられるようになる。しかし「パターン」にはまりすぎると、教師の方の首を締めることになりかねない。一時間に総てを集約してしまおうとせず、毎週の授業に形式をちりばめながら、全体的に釣り合いの取れた学習を構築できるようにしたい。

学校教育の中で、文字・言語環境を整備するということを考えてみる。例えば、「書」という文字を書いてみる。その書き順からはこの文字の成立過程を考えることができる。また、手書きした際の形態からは、それぞれの字形意識や文字感覚といったものが見て取れる。二画目と五画目の長さをどのように書くかということであるが、本来は二画目だけを長くするはずなのに、両方を長くする人の方が多いくらいである。教師の中にも少なくないであろう。これは、明らかに活字の形態に影響を受けている。書写においては、このような字形意識や文字感覚について教えていかなければならないはずである。ところが、学校においても社会においても、子どもの周りからこれらを学ぶ機会や例は消えていきつつある。ワープロなどの普及によって、身の回りには活字ばかりがあふれるようになったからである。この問題に気づき、整えていくことが、文字・言語環境を整備するということになるろう。

【研究会のシステムについて】

学校の教師は、自分の授業に対するプライドも自信もあるのに、その実践を外部に見せることには尻込みする。下手すると教師生命も危なくなるため、自分の授業実践を公開するのには、非常な覚悟が必要となるからである。しかし、いいものを持っている人

を引っ張り出すシステムは確立しておかなくてはならない。それが研究会であり、その人のよさを認めた上で、さらにどのように高め、また深めていくかが研究会の在り方であろう。卑近な例で考えると、バスケットボールの試合では組織化して守るというやり方がとられる。つまり、自分が抜かれても、後ろで誰かがちゃんとカバーしていると信じることによって、システム化が成り立つのである。学校の教師は、このように他人を信じたシステム化ということができないでいる。

教科書は、その魅力の伝達などが教師に総て委ねられているため、内容的にはあまり面白いものではない。教師自身、面白くないという認識をしながらも、主要教材として指定されているために、それで教えることになる。もちろん教科書を一般図書として購入したいと感じる人は、ほとんどいないといっても過言ではないだろう。ところが、『少年ジャンプ』などの漫画は、子どもの心をものすごくひきつけるものがあり、毎週何百万部と売れる。また、その活字を見ると、漢字はゴシック、仮名は明朝という極めて特異な使用のしかたをしている。しかし文字についての興味・関心がもうほとんど失われていて、毎日のように読んでいても気付くことがない。これは子どもだけでなく、教師についてもいえることであろう。自分の周囲にあるものは、総て教材となり得るのである。そのように見ることができると、重要なポイントとなろう。

教材作成については、常に個人の能力適性を念頭に置き、個人差に対応しながら個人の目標に近付けるように、選択の余地を設ける必要がある。今日は、補助教材である練習用のプリントに選択の余地があった。また全体と個人のそれぞれを関連付けながら、どのように指導していくかも考えなければならない。これは、全体の中でどのように個別指導を入れていくかというように換言できる。具体的な指導としては、子どもに「自分で目当てを考えてやってごらん」と指示して、完全に子ども任せにしまうと、かえって繁雑な教授活動を強いられる可能性が高い。まとめたときにも漏れが出てくるであろう。それよりも、「この3つがポイントだから、ここからどれを目当てにするか決めてやってごらん」とした方が、全体を掌握した指導を行いやすい。このようなポイントとなる選択肢は、子どもといっしょに考え、導き出すようにすればよい。

【書写の必要性】

書写の必要性を考えると、技術的に高めること以前に、文字を書くということの必要性をまず認識しなければならない。文字は人差し指で書くものであり、人差し指で認識するものであるという事実を踏まえれば、書くという行為が定着を助けることも理解できよう。書くことや二足歩行することは、意識化して学習していくうちに、だんだん無意識でできるようになり、その成果を自分なりに活用することができるようになる学

習の典型である。書写教育というのは、まさに書くという行為を意識化している状態なのである。無意識に文字を活用できるようになるまでは、意識化して鍛える必要があるといえるだろう。

学習を意識化するためには、子ども自身に「文字ってなんだろう」ということを考えさせていかなければならない。我々は、悪魔の文字と呼び、その難解さや長い歴史を背負っている漢字と、そこから派生した仮名を扱っている。また、それだから漢字を書写の授業で考えるときに、成り立ちに言及しようとするのである。

情報化の中で、書写教育・国語教育の存在理由が問われる。しかし、ワープロがあれば、書写教育は必要ないのだろうか。コンピュータ・ソフトで文章が作成できるから、作文教育はいらないのか。当然そんなことはないと言い切ることができ、その根拠もあるはずである。人間の言語活動には、それを支える周辺の教育が欠かせない。書写教育などもその中に含まれよう。

ワープロに慣れ親しむ生活を続けていると、文字を忘れるという。我々は、確かに手書きしようとしたときに、横線の本数などがあやふやになることはある。しかし文字そのものがまったくわからないという、「0（ゼロ）の状態」になることはない。そこには、昔受けた書写教育・文字教育が厳然と存在することを認めなければならない。それでは最初から文字教育を受けない子どもは、今から20年後、目の前にある自分が使用する文字を手によって再現できるのだろうか。恐らく無理であろう。そうってから、学習体系を再構築するのは非常に難しいということも、我々は認識しておかなくてはならないのである。



いつもながら、とってもとっても濃いお話でした。でもこ難しくなく、ちゃんと私にもわかる言語で話してくださるのです。すごく身近な例を織り混ぜて。なんてテクニシヤンの先生♥♥そして私は、またまた尊敬のまなざしでその横顔を眺めさせていただきながら、社への帰路についたのでした（もちろん運転は先生でした。運転手にもなれない私…）。でも先生のお疲れは思いの外激しかったご様子で、やっぱり知らない人の前で話すのは大変なことなのだと感じました。（お疲れなのはそれだけが理由だろうか…。複雑な心境です）とにかく、今日はゆっくりお休みください。ねっ先生。

